

条約締結なすべきに 得意顔して規約の
 勵行などと叫ぶとは 片腹痛き事なるぞ
 法權撤去や稅權の 回復事業は淺薄の

小刀細工に成就なるべきか 上下心を協せつつ
 正々堂々一歩だも 譲らず退かず飽迄も

皇國（みくに）の為に尽すこそ 真に吾人の大急務
 愉快じや 愉快じや

そしてこうした民族主義がやがて國粹風潮の抬頭を促し、欧化風潮に水をさす結果となつた。しかしそれがパン食にどのような影響を及ぼしたかについてはあとで言及する。

第三章 外人居留地のパン

第一節 外人居留地の誕生

この辺でパン食普及基地としての役割を果した五港と東京の外人居留地であつた築地の状況を概見したい。
 まず開港開市の年代であるが、これを列挙すると次の通りである。

開港開市略年譜

西 歴	年 代	月	事 項
一八五九	安政六	五	神奈川(横浜)長崎、箱館を開きロシア、フランス、イギリス、オランダ、アメリカとの自由貿易をゆるす
一八六七	慶応三	六	兵庫(神戸)を開港する
一八六八	明治一	七	大阪を開港場とする

一八六八	明治一	一一	東京鉄砲州(築地)に互市場を開く
〃	〃	一一	新潟を開港する

以上が開港開市の略年譜であるが、この中パン食普及史上大きな役割を果したのは横浜、神戸、東京の三都市であつた。

もちろん長崎、函館、新潟等の開港場もそれぞれの地方の食生活洋風化基地としての役割を果したにはちがいないが、その歴史的な役割はあくまで地域的なものであつた。これはこれらの開港場の立地条件のしからしめるものでよいとかわるゝとかの問題でないこともちろんである。

しかしこの中でも最も大きな役割を果したものは横浜であつた。それは横浜が東日本を代表する開港場であつたばかりでなく、江戸という世界有数の大都市の表玄関であつたことと、明治維新を機として首都が京都から東京にうつつたという好条件があつたからであるが、いま一つは横浜が神戸よりも九年も早く開かれたということである。

横浜につく歴史的役割を果したのは神戸であるが、神戸の開港が意外におくれたのは、この港が攘夷の本家本元である京都の表玄関であつたが為に、朝廷が異常なまでにその開港を忌避したからであつた。しかし神戸は何といつても西日本の大玄関である。したがつておくれ開港したにも拘らず、その洋風化のスピードは早かつた。その原因の一つが後背地に大阪京都という二大都市をもつていたことにあることはいふまでもない。

長崎は我国最古の開港場であるが、安政の開港以後は唯一の「鎖国の窓」としての機能をうしなつてしまつた。そのために単に九州地方の食生活洋風化拠点としての役割しか果し得ないことになつた。

函館は蝦夷地の表玄関である。しかし当時の北海道の大部分は人口稀薄な一大原始林であつた。首都札幌もその原始林を切り拓いてつくられたものである。そんなわけでこの開港場もごく限られた役割しか果すことができなかつた。

新潟は裏日本唯一の開港場としての好条件にめぐまれてはいたが、ここ

も後背地に大都市をもたなかつた。そのために単にせまい地方的拠点として終らざるを得なかつたのである。

つぎは江戸あらためて東京の築地居留地であるが、これまた予想されたほどの役割を果たすことなくして終つた。その原因の一つは居留外人が築地に集結せず東京市内に分散してしまつたことにある。しかしそれよりも大きな原因は明治五年（一八七二）に横浜、新橋間の鉄道が全通して横浜の外人は東京で用を足して横浜に日帰りできるようになつたことであつた。

神戸と大阪の関係も東京の場合によく似ている。それは明治四年（一八七一）に神戸、大阪間の鉄道が開通したために、神戸の外人は大阪で用を足して神戸にもどるようになったので、大阪に腰をすえるものがあまりなかつたからである。

なお東京銀座の木村屋総本店から日本独特の糍だねパンが拡がつていつたことをここで特に付け加えておきたい。

第二節 横浜居留地のパン

まず横浜の状況であるが、横浜市編の「横浜歴史年表」によるとその変貌の状態は次の通りであつた。

(註)▽印は筆者が挿入したもの。

横浜市史年表(抄)

西 歴	年 代	事 項
一八六一	文久一年	横浜山の手に外人墓地を設ける
一八六二	文久二	▽ヘボン博士居留地に診療所を開設する
一八六一	文久二	居留地八〇番で聖心教会堂の献堂式挙行される
一八六三	文久三	▽ヘボン博士夫人居留地に英学塾を開く
一八六三	文久三	仏人クラーク横浜ペーカリーを開業
一八六三	文久三	▽幕府攘夷の勅命に従い三港の閉鎖と外人退去を通

告する

英人カーチス山の手で西洋野菜の栽培をはじめ

▽英兵千五百名突如上陸仏これに倣う

中川屋嘉兵衛英駐屯部隊御用商人となる

横浜製鉄所起工首長は仏士官ドロートル

横須賀造船所起工仏から三十余名の技師到着

房州の百姓前田留吉牧場を設けて搾乳をはじめ

この頃の淀泊船は商船二隻軍艦九隻であつた

▽居留地にゴロープホテル開業

▽幕府横浜にフランス語学所を開設する

▽中川屋嘉兵衛万国新聞にパンの広告を出す

このころ商船二九隻、軍艦十隻

▽外人居留地にクラブホテル開業(のちのセンターホテル)

町田房造馬車道に氷水店を出す。長崎の大野谷蔵姿

見町に西洋割烹店城陽亭を開業する

▽ミッション・スクールのフェリス女学校発足する

▽ミッション・スクールの横浜共立学園誕生する

▽このころ居留地に四軒の異人ペーカリーがあつた

▽横浜の山手天沼に米人経営のビール醸造所発足す

る(キリンビールの前身)

▽横浜・新橋間鉄道全通する

▽横浜・新橋間電信線なる

▽米國太平洋郵船の横浜定期寄港決定する

▽長崎出身の片岡伊右衛門ハムの製造販売をはじめ

一八七三	明治六	▽横浜海岸通りにグラランド・ホテル誕生する
一八七四	明治七	▽横浜に初めてフランス人経営の西洋菓子屋出現する
一八七六	明治九	▽数年前から営業していたものに私人経営のオリエンタル・ホテルがあつた
一八七八	明治一一	英のピーオー汽船上海航路を横浜まで延長する ▽箱根宮の下に外人専門の富士屋ホテル誕生 ▽肉類等の食料品を毎日横浜から馬車便でとりよせる

以上が直接間接ペンに関係した横浜のうごきであるが、このうちヘボン博士の診療所、横浜ペーカリーの開業、中川屋嘉兵衛のペンの新聞広告等のことはすでに言及済みであるからここでは改めて言及しない。

この年譜全体を通じて云えることは、第一はアメリカ人がキリスト教の布教盤を築くために診療所やミンシヨン・スクールの経営につとめ、それがパン食普及の役割をはたしたということである。第二はフランス人の活躍であるが、フランスは前述の通り幕府のスポンサーであつたから横浜製鉄所、横浜仏語学校、横須賀造船所のために多くのフランス人を送りこんだ。その中には幕府の海軍指導の士官なども加わつていたが、その大部分は横沢に居住していた。フランス人経営のホテルなどがいちちはやく誕生したことなどもこうした背景があつたからで、ここからフランスパン、フランスケーキ、フランス料理が拡がつていったのは決して偶然ではない。少数ながら横浜の山の手にはフランス軍が常駐していたことも忘れてはならない。

第三はイギリス人の影響であるが、横浜貿易の三分の二以上はイギリス貿易によつて占められていたし、山の手には元治元年（一八六四）から明治初頭まで一千五百人以上の英軍が駐留していた。英人がいちちはやく西洋野菜の栽培をはじめたのも、中川屋嘉兵衛がこの駐留軍の御用商人となり

いちちはやく肉屋をはじめたのも、外人クラークの横浜ペーカリーが横浜一のペーカリーにのしあがつたのもこの貿易と英軍駐留と無関係ではない。この横浜のパンの主流がフランスパンからイギリスパンに代つたのは明治十年（一八七七）ごろであつたが、イギリスのピーオー汽船会社がその上海航路を横浜まで延長したのは明治九年であつたところからみると、この船でイギリスから大型のイギリス式型焼パン用の粉が輸入されるようになった為ともかんがえられる。

この横浜の古老の回顧談によると明治四年（一八七一）ごろ山下町に四軒の外人ペーカリーがあつたという。そのうちの二軒はイギリス人経営であつたが、もつとも大規模な製パンをやつていたのはフランス人クラーク経営の横浜ペーカリーであつた。したがつてそのころこの港に入港する外国の軍艦や商船は必ずここに大量のパンを注文したし在留外人の多くもこの店のお得意であつた。

横浜ペーカリーこと宇千喜パンの開祖打木彦太郎は明治初頭この店にやとわれ、明治二十一年（一八八八）クラークが老令のため帰国するとき、そのノレンをゆずりうけた。ときに彦太郎は三十五才であつたから、この店に入店したのは明治六、七年ごろだつたのだらう。

横浜は近代日本のパンの出発点であつたが、ここでは容易に日本人経営のペーカリーが出現しなかつた。明治初頭発足の内海兵吉がその第一号だつたといつても過言ではないが、このように邦人ペーカリーの出現がおくれたのは、異人ペーカリーの技術がすぐれていたからでもあるが、いま一つは外人が日本人技術者の手腕を信頼しなかつたからでもある。

そのために横浜ペーカリーをゆずりうけた打木なども苦勞をかきねたが、やがてその技術と人柄が外人仲間知れわたり、外国の艦船の注文もふえていつたという。

関東大震災までパンの本場といわれた横浜に修業のためやつてくる職人の多くは、この横浜ペーカリーなどで腕をきたえた上独立するのが慣わしであつた。

この打木の場合にみられるように明治初頭の技術者の多くは外人ベーカーリーにとめたり、領事館や外人商社または外人の私邸の料理方として技術を身につけたが、その結果いろいろな製法に習熟した。この横浜からイギリスだね、フランスだね、ロシヤだね、南京だね（一名チャンだね）等々の製パン法が拡がっていったのは、その主人の国籍がちがいパン種とその培養法が異つていたからであるが、その為の当時の職人は自分がならつた製法のパンしかつくる事ができなかった。

この横浜でホップスだねの製パンが行なわれるようになったのは明治五年（一八七二）以降であつた。それはこの山手の天沼に外人経営のビール醸造所（キリンビールの前身）ができ、そこから容易にホップスを手に入れられるようになったからであつた。

横浜のパンの需要は横浜の人口と在留外人の増加に正比例して伸びていったが、この点を数字によつて立証するとあらまし以下の通りである。

横浜の内外人々口の推移年譜

年次別	日本人	欧米人	支那人
安政六年	一〇一人	不明	不明
慶応三年	二〇、八八〇	一、一三〇	不明
明治二年	二八、五八九	不明	不明
明治五年	六四、六〇二	一、〇七〇	九六三
明治一〇年	五七、八一八	一、二〇五	一、一四一
明治一五年	七六、一三五	一、三五八	二、一五四
明治二〇年	九四、三九〇	一、三三一	二、五七三
明治二五年	一五〇、七〇八	一、五九〇	三、三三九
明治三〇年	一八七、四五三	一、九八六	二、七四二
明治三五年	三一一、六九五	二、四四七	三、八〇〇
明治四〇年	三七八、八八四	二、三八三	三、六四四

これで見ると中国人の南京街の急速な成長が目につくが、ここから支那料理と支那マントーが拡がっていったことはいうまでもない。

第三節 神戸居留地のパン

東日本の横浜と羈を争う神戸のパン関係のあゆみの跡を神戸市編の年譜などを参照してまとめてみると、あらまし以下の通りである。

神戸の食生活洋風化略年譜

西歴	年代	事項
一八六五	慶応一年	四国連合艦隊横海にせまり兵庫開港を要求する
一八六七	同三	兵庫を除く安政仮条約勅許 兵庫開港勅許
一八六八	明治一	兵庫の内外人雑居をゆるす 汽船の阪神間定期航路開設
		神戸から横浜へ牛肉の海上輸送開始 仏人ムニクイ元町に礼拝堂を創建
		当時兵庫の人口二万五千人、七ヶ国居留民四七〇人 居留地に米、英、仏人経営のベーカーリー誕生
一八七〇	明治三	元町に邦人経営の牛肉屋誕生 居留地に天主堂創建
		神戸―横浜間、神戸―長崎―上海間定期航路開設
		邦人経営牛豚屠場竣工 邦人経営のホテル誕生（のちのイースタンホテル）
		米国産小麦の試植開始 米人宣教師神戸和英女学校設立
一八七二	明治五	阪神間鉄道開通
一八七四	明治七	邦人馬鈴薯の試植開始
一八七五	明治八	米人宣教師神戸和英女学校設立
一八七六	明治九	神戸在住欧米人三四〇人突破

一八七七	明治一〇	仏人宣教師女子教育院をおこし孤児を収容
一八八二	明治一五	仏人経営進光女学院誕生 元町の二宮盛神堂洋菓子を売りだす ホテルドコロニー発足(のちのオリエンタルホテル)
一八八七	明治二〇	東海道路線全通 日粉株式会社発足
一八九二	明治二五	仏人経営ベーカリーのドンバル誕生 この頃武田伍八、南玉吉、西村松之助の三人がパン屋をやっていた

これで見るとこの神戸も横浜の場合と同じように外人ベーカリーがまず発足し、相当おくれて日本人ベーカリーが出現したことがわかる。そしてここは横浜とちがつてフランスパンが優位を占めた。仏人経営だったドンバルがいまも健在であることは印象的である。

この神戸で職をおぼえた日本人が西日本のパンの開拓にあつたのは、横浜が東日本のパンの開拓基地になつたのと同じように、その技術水準が高かつたからである。

記録によると日清戦争前に邦人パン屋が三軒あつたとあるが、その創業年代は不明である。しかし東海道線が全通した明治二十年(一八八七)ごろの発足とみるのが至当ではなからうか。

第四節 長崎居留地のパン

長崎に外人居留地が設けられたのは横浜、函館と同じく安政六年(一八五九)の五月であつた。それまで小さな人工島(オランダ屋敷)にとちこめられていたオランダ人も、米、英、仏、露人と同じくこの居留地に住むことになつたことはいうまでもない。

これは長崎にとつて一つの劃期的変化であつたが、しかしこの変化は西

洋文化受容の大玄関が長崎から横浜へうつるという変化でもあつた。それはともかくとして、この長崎居留地が誕生してから三年後の文久二年(一八六二)居留地の外れに大浦天主堂が竣工した。土地の人はこれをフランス寺と呼んだが、この出現をよるこんだかくれキリシタンが姿をみせたことから幕府とフランスの間に紛争がおこつた。その紛争に火をつけたのは成立早々の明治維新政府である。それは維新政府が慶応三年(一八六七)七月、突如として浦上・五島地方のかくれ切支丹三千四百余名を檢挙したからである。この暴挙を知つた列国は勿論嚴重抗議してその釈放をせまつたが、特にフランス寺の人々の奔走は涙ぐましいものであつた。しかし幕府とよかつたフランスはイギリスにあと押しされた新政府に対しては無力であつた。そのためにこのかくれ切支丹の釈放は明治六年(一八七三)の邪教禁止の制札撤去まで引きのばされてしまつたが、事態の急を知つたローマ教王はあらたにプティジャン司教とド・ロ神父を救援のために長崎に急派したのである。

それは翌明治元年の夏であつたが、二人の釈放運動はそれからヤソ教黙認の明治六年(一八七三)までつづいた。

この政策転換によつて再び郷土の土をふんだ信徒たちの救援運動がフランス寺の新しいしごとになつたことはいうまでもないが、この救援運動の一段落を待つてド・ロ神父は長崎市外の黒崎村に教会を新設、その駐在神父となつた。それは明治十一年(一八七八)のことだつたが、ド・ロ神父はこの地にやがて女子修道院をつくつた。それはこの地が南蛮交易時代以来のヤソ教の聖地だつたからであるが、神父はここに五十余人の修道女を収容、その人々にフランスパンやマカロニの技術を授けるとともにフランス流の刺しう、牧畜、農耕の技術も授けた。このド・ロ神父の訓陶をうけた大石トク女は当時を追懐して、神父が手ずから築かれたパン焼窯は、外壁を煉瓦石でかため、その上を泥でぬりつぶしたものであつた。神父はフランスから持参したロストルやアンクルをその中に敷き、鉄板を張つた窯でおいしいフランスパンを焼いたと語つてゐる。この鉄板も太平洋戦争

のとき供出を命ぜられていまは往時を偲ぶ外ないが、ド・ロ神父が長崎で永眠したのは大正三年（一九一四）の十一月七日であつた。

しかし神父の執念はいまも長崎市民の中に生きてゐる。それは長崎市民のパン食率が、九州第一だということが総理府家計調査で実証されているからである。

以上はフランスパン関係の史実であるが、もともと長崎はオランダ流のパンの本場であつた。そこでその長崎のオランダパンで日本の海軍が呱呱のこえをあげたことをここで特に付け加えおきたい。

幕府が長崎奉行所の西役所に海軍伝習所をつくつたのは開国の翌年にあたる安政二年（一八五五）であつたが、その教官に充てられたのはオランダ士官四十名であつた。練習にはオランダ寄贈の観光丸が充てられたが、幕末の大立物での中に幕府の海軍総裁になつた勝海舟もこの学生の一人である。彼等が兵食に充てられたオランダパンで練習にはげんだことはいうまでもない。しかしこの練習所も安政六年（一八五九）築地の鉄砲州にうつされてしまつた。

なお長崎の町年寄で西洋流砲術の大家であつた高島秋帆の配下作太郎が江川担庵邸で兵糧パンを焼いたことは言及済みであるが、こうした一連の事実はすべて長崎がパン食文化発祥の地であつたことを示すものである。

第五節 東京築地居留地のパン

函館と新潟のパンにはあとで言及することになるので、ここでは築地居留地のパンについて若干言及するが左記はこの土地の略年譜である。

明治初期の築地居留地年譜

西 歴	日本 歴	事 項
一八五八	安政五年	日米修好通商条約により、文久二年（一八六二）より築地開市と決定
一八六七	慶応三年	十月五日築地鉄砲州に外人居留地を設定

一八六八	明治元年	十一月十九日築地居留地開市
一八六七	慶応三年	九月築地ホテル館竣工（食パンの開祖）
一八六八	明治元年	正月築地に江戸ホテル開業
一八七〇	明治三年	築地に牛馬会社（牛乳）誕生 築地新栄町に眞本パン誕生
一八七一	〃 四年	築地に精養軒ホテル竣工
一八七二	〃 五年	二月二十六日銀座、築地大火
一八七四	〃 七年	瑞西人チャリヘース築地で食パン及び清冷飲料水の製造開始（チャリ舎の出現）

以上が明治初頭の築地史であるが、政府が外人むき遊廓までつくつて築地の繁栄を策したに拘らず、この地は意外に発展しなかつた。その原因が外人が市内に分散居住するようになったことと、新橋横浜間の鉄道全通以來横浜の外人は東京で用を足して日帰りできるようになつた点にあることはすでに言及済みである。

しかしそうはいつてもここは東京でもつとも異国情緒ゆたかな市街地であつたことにはかわりはない。したがつて東京の食パンの本場がこの築地であつたことも侵すことのできない事実である。

上記の年譜にもあるように、ここに築地ホテル館が竣工したのは開市前年の慶応三年（一八六七）であつたが、翌明治元年（六八）には江戸ホテル館が竣工した。何れも外人向けのホテルであつたからここでは本格的な食パンがつくられた。

明治三年（一八七〇）になると築地新栄町に眞本パン店が誕生したが、この店が明治初頭の東京における代表的食パン店であつた。明治六年刊の「雑誌」第一五六号をみると人口の膾炙せるパン屋としてこの店の名を挙げているからである。

この店は新人を歓迎したので、ここには多くの腕きぎの職人が出入りし

た。大部分は横浜で修業した人々であつたが、これらの新人が各所にちらばつて食パンを普及したものだといふ。

明治四年（一八七一）にはこの築地の一角に精養軒ホテルが誕生した。経営者は北村重威でそのあと押しは岩倉具視卿であつたといふ。北村は料理長としてスイス生れのフランス人チャリヘスを招いて商売をはじめた。ここでつくつた食パンはホテルの用に供するだけでなく、市内の外人宅にも配達されて非常に評判になつた。

ところが明治五年（一八七二）二月二十六日の大火でこの築地も全焼した。火元は和田倉門内の旧会津藩邸であつたが、折りからの大火で日比谷から銀座、築地の一帯が焦土と化したのである。

その焼けあとに出現したのが銀座の煉瓦街であつたが、築地ホテル館と江戸ホテル館は再興成らず、精養軒ホテルだけは翌年再興した。しかしその規模が小さかつたので料理長のチャリヘスは再就職を断念、築地居留地にチャリ舎という家号の店をもつてフランスパンの商売をはじめた。それは明治七年（一八七四）のことだつたが、それから明治・大正にかけての長い期間、このチャリ舎は東京を代表するフランスパンの店として繁昌した。チャリ舎のお得意の主力は在留外人であつたが、チャリ舎が伸びたのは在京の外人がどしどしふえていつたことにも原因がある。

昭和初頭新宿中村屋の職長に迎えられた石崎元次郎はこのチャリ舎の出身であるが、彼はこの築地が東京における食パンの誕生地であると断言「この築地居留地はアンパンの元祖木村屋総本店と共に永遠に業界史に記録されるべきであらう」と語つてゐる。

このチャリ舎に続いて亀屋が築地でパン屋をはじめたが、この店の主人は外人専門の商人であつたといふ。

（付記）五港中の函館及び新潟居留地のパンに付いては別に言及する。

第四章 パン食文化の開拓者

第一節 居留外人の役割

およそ食生活くらい保守的なのはない。そのもつとも保守的現状維持的な食生活を洋風化するのに大きく役立つたのは居留外人であつた。日本人が欧米に居留すると、欧米人の食生活に順応すべく努力するが、欧米人は日本にやつてきても欧米式なパン食生活をつづける習慣からぬけきれない。なぜこういうことになるのかについてはいろいろな見方が成り立つたろう。しかしそれはともかくとして、ここでハッキリ云えることは、この居留外人たちによつて日本民族の食生活が大きく洋風化され、パン食が浸透していつたといふことである。この点は欧米人が多数居留していた横浜、神戸、長崎などのパン食率がいまなおたかいことによつてみごとに立証されてゐる。

このような事実からいつてパン食文化の発達と居留外人は不可欠の関係にあるので、以下この点に言及する。

まづ第一に開国後まづさきに海外文化輸入の大支関となつた横浜の人口からみた洋風化現象の推移についてみると、あらまし以下の通りである。

横浜の膨脹状況（安政六年開港）

西 歴	年 代	日 本 人(人)	欧 米 人(人)	支 那 人(人)
一八五九	安政六年	六〇〇	不 明	不 明
一八六三	慶応三	二〇、八八〇	一、一三〇	〃
一八六九	明治二	二八、五八九	不 明	〃
一八七二	〃 五	六四、六〇二	一、〇七〇	九六三
一八七七	〃 一〇	五七、八一八	一、二〇五	一、一四一
一八八二	〃 一五	七六、一三五	一、三五八	二、一五四